

穏やかに生きたい悪役令息なのに、

過保護な義兄<sup>あに</sup>たちが構いすぎてくる2

くイヴは悪役に向いてないく

### 《ジャン・ドウ・デキュジス》

ハディス国の第二王子で、イヴの元婚約者。アンリと婚約したことで少し性格が丸くなった。



### 《遠田愛莉》

伊吹の六歳下の妹。両親が離婚した際に母親についていたため、伊吹は長く会えていない。



### 《アンリ・オーフレイ》

ジャンの現婚約者。明るく元気な性格の持ち主。この異世界が伊吹たちの前世の世界であると教えてくれた。

## 登場人物 紹介

Odayaka ni ititai akuyaku poisoku  
nanoni, kahogona ani tachiga  
kamaisugite kuru

Characters

### 《イヴ・エル・シヤール》

遠田伊吹という日本人だったが、悪役令息イヴに転生してしまった。転生前は家族に恵まれていなかったが、転生後は家族愛を知り幸せな生活をおくっている。



### 《レオン・ドウ・デキュジス》

イヴたちの住むハディス国の第一王子で、アルベールの婚約者。王族らしい性格だが愛嬌があり親しみやすい。

### 《アルベール・エル・シヤール》

レオンの婚約者で、竜騎士団の団長でもあるイヴの血の繋がらない兄。イヴや末弟エディーを愛してやまないブラコン。

「ん、んん、う……あ、な、なに……んッ」

体が熱い。薄く開いた口から媚びるような息が漏れて、それが気持ち悪いくらい甘ったるい。何かに縋りつきたくて手を伸ばして、たどり着いた手を掴んだ。ぎゅっと握った彼の指先はいつも通りほんの少し冷たい。

「あ……あ、うう、んあ、や、んア、やだあ……」

「駄目だよ、イヴ。ね、ほら、ちゃんと出して。出さなきゃ帰れない」

「う、なん、でえ……っん、ふ、うっ」

なんでこんなことになってるの。何が起きてるのか把握できていない。

でも混乱した頭では、はっきりと訊くことはできなかった。

くすくすこぼれる笑い声が抑揄いと熱を持っていて、つい身を振り、膝を擦り合わせてしまう。

背後にはじんわりと体温を感じる。誰かが背中から覆いかぶさっているようだ。下腹部と胸元を這う手は同じくあたたかい。

何が起きているかはわからないけれど、誰が相手かというのは、耳を擦る笑い声や触り方、体温

でわかる。

「ん、う……れお、んさまっ、あ、う、や……んうう、そこ、やッ、あ、う」

胸の突起を潰されて、びく、と肩が跳ね、爪先がシーツを蹴る。ぐっと下半身に力が入って、どうにか耐えた。

視界の端に見えたカーテンの隙間から漏れる太陽光が、今が早朝だと示している。こんな朝っぱらから盛るだなんてと思うけど、こうなったら制止は口だけのものだ。

「我慢しないの。昨夜の分じゃ足りなかったかな、イヴの負担になるからと心配していたのだけだ」

「うあ、アルにいさま、う……ん、ん」

冷たい指先が頬を撫で、唇の端を拭う。遊ぶように数度その唇を親指の腹で押すと、彼は柔らかく目を細めた。

黒髪と黒い瞳を持ち、おれに優しく触れる男性は義兄であるアルベールだ。

血の繋がりが無いにもかかわらずイヴを溺愛する兄。穏やかで優しく、物腰も柔らかい。もちろんそれは両親にも末の弟にも遺憾なく発揮される、イヴの自慢の兄だ。

彼は額に唇を落として、いつものようにおはよう、と微笑むけれど、こちらはそれどころではない。

もう一度なんで、と呟いたおれに、背後からそれはこっちの台詞だよ、と笑い声が混じった声が耳元を擦った。その低い声に腰が揺れる。

「……ッ、う」

「お前はあれと随分仲良くなったようだが、こうなるのをわかっているのか？」

「あれっ、て……っん、んあ、っ」

下腹部に触れていた手のひらがするすると肌をさすって下に移る。太腿の辺りを撫でられると舌が応でも反応し、期待してしまう。

——早く触って。

そう口走りそうになるのを慌てて咳払いで誤魔化すと、また耳元で笑い声がした。どうしよう、これ、やばい気がする。

「や、やめて……ん、レオンさま、も、いい、からっ……」

「出さないと帰れないとアルベールも言っているだろう」

太腿のところでどうにか彼の手を止め、振り返って制止する。

まるで絵から飛び出してきたかのような現実味のない銀髪の下で、宝石のような薄紫の瞳が揶揄うように揺らいた。

口調や指先こそ意地悪だけれど、彼が幼い頃からイヴを心配して傍にいてくれたことを知っている。義兄のアルベールよりも幼いイヴを知っているのは、彼がイヴの元婚約者の兄という立場からだ。

ハディス国の第一王子であるレオンは、第二王子で、王太子であるジャンの腹違いの兄で、アルベールの婚約者。彼の弟のジャンは、イヴの元婚約者だ。

男性同士だとか、義理とはいえ兄弟がどちらも王族と婚約するなんて認められるのかとか、そんなことはどうだっていい。

なぜならここはBLゲームの世界なのだから。

王子さまがいるとか、現実味のない髪色や瞳の色の人間がいるとか、魔法があるとか……あとは、おれがそのBLゲームのキャラクターになってしまったとか。

ありえないことがあつたって仕方のない世界なのだ。

——そう思っていた。昨日までは。

『イヴさまはぼくの推しなんです。かわいいなつてずっと思つてて』

それは、つい昨日のこと。

今朝こんなことをすることになった原因である彼は、天使のように愛らしく微笑んでいた。

その表情は画面越しに何度も見たものだから見覚えがある。

彼は、生前のおれが間違つて買ったBLゲームの主人公アンリだ。

アンリは同性の自分が見たつてかわいらしい顔をしている。

明るいブラウンのふわりとした猫毛、艶々とした人形のような肌。長い睫毛を伏せて頬を上気させ、上目遣いをしては小さな口が笑みの形を作る。そんなあざとい仕草が許されるのは主人公の特権だ。

誰にでも優しい主人公。誰にでも愛される主人公。そんな彼が学園の卒業パーティーで、周囲の

視線が集まる中おれの頬をひっぱたいた。

能力を持つ人間は貴族に多い。そんな人たちが通う学園に、アンリのように能力を持つ平民は数えるほどしかない。

普通なら、平民の暴行を宥める<sup>なだ</sup>だろうが、誰もそんなことはしなかった。叩かれた相手が学園で嫌われていた悪役令息、イヴ・エル・ミシャールだったからだ。

生き物の心を読む彼は気持ちが悪く思われていたし、童すら従えられる能力を悪用するつもりだと疑われていた。

実際のイヴの能力は生き物と会話ができるだけで、心の中なんて読めないし、気の弱いイヴには無理矢理童に悪いことをさせるといふ発想などなかった。イヴを悪人に仕立てようとした噂話が捻<sup>ね</sup>じ曲がつて広まったのだろう。

でもイヴは、それを訂正できる性格ではなかったし、そんな環境にもなかった。

もともと冷たかった婚約者のジャンからは距離を取られまともな会話はできず、彼がアンリと仲良く過ごす姿をただ見ることしかできなかった。唯一の友人であるユーゴも段々と疎遠になった。

他のクラスメイトも教師も、皆がアンリを慕い囲う。

そんな状況だったから、卒業パーティーでは、冷たい視線が貴族の頬を叩いた平民のアンリでも、婚約破棄を言い渡したジャンでもなく、被害者のはずのイヴに注がれた。

——遠田伊吹<sup>えんたいいぶき</sup>であるはずの自分がイヴとしてゲームの中にいる。

そう気付いたのは、彼にひっぱたかれた瞬間のことだった。

——遠田伊吹の人生は、そういうものではなかった。

奔放な母親、家庭を顧みない父親。そして、おれが守らないといけないかわいい妹。

おれがどうにかやっていけたのは妹の存在によるところが大きい。

両親は不仲で離婚した。妹が母親に、おれは父親についていくことになったけれど、父親はすぐに再婚した。その相手にはこどもがいて、腹違いの弟だった。

新しい家族の中で、おれだけ浮いていた。

家族の団欒には交じらず、ひとりの時間は自室で、以前妹からもらった少し古いゲーム機で遊んでいた。玩具屋で間違えて買った中古のBLゲームは時折挟まれるパズル目当てだった。でも、何度もプレイしたおかげで内容は覚えてる。

けれどその知識はまったく役に立たなかった。ゲームの中にいる、とわかったのがゲーム本編の終盤も終盤だったからだ。なぜゲームの中にいるのかはわからない。でも元の世界の自分は死んだのだろうということだけは、ぼんやりと理解した。

悪役令息のイヴに婚約破棄を言い渡した後、アンリとジャンは婚約し結婚、めでたしめでたし。そんな状況で、イヴになったおれが巻き返すのはもう不可能だった。

とはいえおれは別にジャンに思い入れはなかったから、ふたりが結婚することに関してはどうでもよかった。いや、どうでもいいわけではないけど、ジャンとどうこうなりたいわけではないから。

おれは卒業パーティーの後、実家の屋敷に戻った。屋敷には優しい両親とかわいい弟エディー、

そして弟を溺愛する義兄アルベルがいた。

生前、妹以外の家族愛に恵まれなかったおれは、その家族のためにこの世界でイヴとして生きることにした。妹を置いてきてしまったことを除けば、なんてしあわせなことだろうと思った。この世界で穏やかに過ごせたらいいな、と思った。

生き物と会話ができる能力を武器に竜舎に通い、アルベルが団長を務める竜騎士団にも相談役のような形で受け入れてもらった。アルベルの婚約者であるレオンにもよくしてもらい、どうかこの世界で暮らしていた。

そんな折、アンリとまた関わるようになった。彼と話すことで、この世界がゲームの中ではないことを知った。なんと、アンリも伊吹と同じ世界から来たいわゆる異世界人というやつだった。

この世界はあのイヴが生きていた世界の前世にあたり、その前世を基にあのBLゲームが作られた、と教えられたときは衝撃だった。

そしてアンリは、この世界を何度もやり直しては最善の未来を目指していることを教えてくれた。伊吹がイヴとしてこの世界に来たことで、やり直しは最後になるかもしれない。次にやり直しできたとしても伊吹がどうなるかわからないので、これを最後にしたい。そのためにイヴは素直にアルベルとレオンを受け入れてほしい。

そうアンリに懇願された。

別にアンリに言われたからそうしたわけじゃないけれど、結局おれは、体も心もアルベルとレオンを選んだ。

褒められることではないとわかっていた。イヴに成り代わって、アルベールとレオンの未来を歪めてしまうのだから。

でももう、ここで生きていく選択肢しかない。

それなら、伊吹として得られなかった愛を受け入れて、イヴとしてしあわせになりたい、愛されたい。

そう思ってしまった。

「ん、あ、やだ、出る、あ……ッ、やだっ……」

「何が嫌なの、エディーに会いたくない？」

「ちが、違うっ……んう、う、汚れ、る……っやだ……！」

「こんなことになってるのに、そんなことを気にする余裕はまだあるんだなあ」

「うあ……！」

きゆう、と自身を握られて、情けない声が出た。恥ずかしくて顔から火が出そう。

以前アンリが言っていたことは理解できるけれど、すべてに納得できるかというところではない。こんな体になって大丈夫ですよ、と頷けるわけがない。

アルベールとレオンが言う『出さないといけないもの』とは魔力のこと。おれは今アンリに能力をかけられているのだ。

彼は相手を発情させるという、BLゲームの主人公とは到底思えない能力を持っている。

アンリはその能力を使っておれに、アルベールとレオンを早く受け入れると言ってきたのだ。それは昨夜叶ったはずだけど、まだアンリの魔力が体内に残っていたのだろうか。

体に入った他人の魔力は、基本的にその本人か一部の能力者にしか取り除けない。

あとは時間をかけて自然に抜けるのを待つか、もしくは体液とともに体外に出すかしかない。

涙や汗では足りず、血液となると他の問題が出てくる。なので『こういう行為』になるのは当然だ、とふたりは言うけれど、ふたりを受け入れた後だろうがなんだろうが、この行為が恥ずかしいことに変わりはなく……

「イヴがかわいいから、僕たちはずうっとこのままでもいいのだけど」

「このままだと辛いのはお前じゃないか？」

「は、アう、あっ、や、指っ……」

「まだ柔らかい」

くすりと笑われて頬が熱くなる。アルベールが触れるそこが柔らかいのは、寝る前までふたりが触って、ナカに入れていたから……

はつきりとそれを思い出させられて身の置き所がないのに、逃げることも隠れることもできない。

レオンの大きな手がおれの下半身を撫で、アルベールの長い指がおれの体内で動く。そこから先は与えられる快楽にただ息をこぼすことしかできなかった。

「あ、あッ、あう……う、は……んう、う」

アルベールの肩とレオンの手首を掴む手に力が入る。自分の荒い息と衣擦れ、それから広い部屋

に響く水音。ふたりの熱を含んだ笑い声が聞こえるなり、ぐんと足先が伸びた。

「んう……あ、う、んん、う、あ、んあ、ッ……」

ぎゅう、と肩を丸めて体を震わせる。みつともない、恥ずかしい、消えたい、と思うと同時に、気持ちいいという感想も浮かんだ。

昨夜はじめてふたりの相手をしたと思えないほど快楽に食欲になったのは、アンリの能力のせいだ。

「治まったかな」

「どうか、ほら、見せてみる」

「えっ、あ、えっ？ うわ、ちよ、捲らなっ……」

ばざりとかかっていたシーツを剥がされる。ワンピース型の寝巻まで捲られて足をばたつかせるおれの額に、アルベールが宥めるようにキスを落として微笑んだ。

「早く落ち着かせて、エディーに会いに帰ろうね」

……まだまだアンリの魔力が抜けるには時間がかかるとでも言うかのようにだった。

結局真つ赤に腫れた目元で家族の前に出られるはずもなく、屋敷に戻れたのは昼食の時間が過ぎたころ。

アルベールもレオンも仕事に遅刻して怒られてしまえばいいんだ、と八つ当たりしたけれど、きつとそうはならなかったのだろう。

ポーカーフェイスがうまいふたりを羨ましく思ったのは今回に限ったことではないけれど、無邪気におかえりなさいと迎える末弟のエディーを前にすると、心の底から取得したいスキルだと痛感した。



あの日から、幾分か経ったある日のこと。

こつん、と窓の外から音がして、意識が浮上した。ううん、と唸って自室のベッドから這い出ると、小花を唾えた小鳥が行儀よく窓枠でおれの目覚めを待っていた。

窓を開けておはようと声をかけると、小花をぼとりと落とし、ちちち、とかわいらしい鳴き声を残して飛んでいってしまう。お礼よ、と言っていた。

少し考えて、昨日巣から落ちた雛鳥を戻したことを思い出す。それっぽっちでなんて律儀な親鳥だ、と笑いを噛み殺して洗面台に向かった。

小さな白い花に花瓶に生ける長さはないから、小皿に水を入れて浮かべることにした。うん、センスはないけどかわいい。

ひとつ欠伸をして向き合った鏡の中には、十八年付き合った自分の顔が映っている。一度も染めたことのない明るい髪と、ほんの少し緑がかかったヘーゼルナッツ色の瞳、左目下の泣き黒子。何も変わらない……見慣れない異世界の服装以外は。

アルベールには純白の竜騎士団の制服があるけれど、おれにそんな決まった服はなく、いつも適当にシャツとズボンを選んで着替えるだけだ。

たまに母さまやアルベールから、今日は冷えるからベストも着たらどうかしら、とか、この上着ならこの靴が似合うんじゃないかな、と駄目だしをされるくらいセンス。今日の服装は大丈夫だろうか、特に問題はないと思うけど、と少し緊張しながら食堂に向かった。

「おはよう、今日の予定はもう決まっています？」

アルベールはいつも早起きだ。彼より先に起きたことなどアルベールが体調不良の時以外なかったかもしれない。朝食後のコーヒーをゆったり楽しむ彼の隣に腰を下ろすなりそんなことを訊かれて、首を捻った。

おれの予定なんて三択しかない。竜騎士団の演習場に行くか、竜舎に行くか、屋敷でのんびりするか。アルベールはとづくに知っているだろうに何を今更。

「アル兄さま、何か特別なことでもあるの？」

逆に訊き返すと、彼はカップを置いて目を細めた。

「イヴをデートに誘おうと思って」

「デートっていうか買い出しじゃん、これ仕事じゃん！」

「はは」

馬車の中で買い出しリストを見ながら悪態を吐く。デートを真に受けたわけではないし、それを

よしとしたわけでもないけど、仕事と遊びではだいぶ話が違う。

「甘いものに煙草にお茶と……お酒も？」

これって本当に遠征に必要なもの？ とアルベールに疑いの視線を向けると、そうだよとあっさり返ってきた。

「嗜好品は度が過ぎなければ必要なものだからね」

目前に迫った竜騎士団の遠征のための買い出し。それが今日のアルベールの仕事だった。

いつもの目立つ真つ白な隊服ではなく、今日の彼は私服……とはいってもかっちりとした上着を羽織っている。伊吹にとって見慣れた黒髪は、この世界では一際目立つ。目立つ隊服じゃなくなくて、こんなかつこいい人は目立つ。仕方ない、服なんかじゃ誤魔化せないほど綺麗な顔立ちをしているんだもの。

「でも業者に頼んでるんじゃないの？」

「食料品や消耗品はね。こういうのはほら、公にするには気が引けるでしょう。だからいつも自分たちで買い出ししているんだ」

……必要と言っておきながら、やっぱり気が引けるものなんだ。

アルベールの答えに思わず笑ってしまった。

まあ確かに、慣れた土地を離れて野営したりする遠征では、嗜好品で心を落ち着かせるのもだしじ。

そうわかっていながらお酒だなんだと楽しむことに人目を気にするのも、国からお給料をもらう

立場の人間だ。

「そうだ。こないだもらったジャムあったでしょ、スコーンにつけたやつ。あれ美味しかったから買いたいな。お店寄ってもいい？ エディーも気に入って指を舐めてたくらいだし」

「あれはお行儀が悪かったね。末っ子だからかなあ、イヴが小さかった時より言うことを聞かない気がするよ」

「そうかなあ」

記憶の中のイヴはおとなしい子だった。甘えん坊のエディーと比べると我儘も多くない。

ただエディーはまだ四歳だ。アルベールがミシャル家の養子になったのはイヴが七歳か八歳の頃だから、そりゃあイヴのほうが言うことを聞けるだろう。

イヴが四歳だった時もエディーほど我儘ではなかった気がするが、結局は幼い頃の自分の記憶だ、塗り替えて都合よく覚えていただけかもしれない……おれにとつてはあくまでイヴの記憶だけだ。

「……元気がなったようじゃかった」

「えっ」

苦笑するおれの頬を撫でたアルベールは、安心したかのように息を吐いて笑った。一瞬戸惑って、それから気が付いた。アルベールはずっと籠っていたイヴの心配をしていたのだ。

イヴは学園入学後、長期休暇で屋敷に戻ってきた時も街に出ることはなかった。

母さまやアルベールに誘われても首を横に振った。街に出ることが怖かった。人目が怖かった。学園ですっかり自信をなくし、冷たい視線を向けられることを恐れていた。

そんなイヴが、買いたいもの、行きたい店があると楽しそうに自分から言い出したのだ。街に出られるくらい元気になったのかと心配性の義兄が安堵するのは当然だろう。

けれどその実、中身は伊吹で、ただ純粹に買い物を楽しみただけ。イヴとして嫌がる振りをするなんて考えつかなかった。

だって貴族さまの買い物だよ。お小遣いだとか手持ちのお金の計算だとかもつたいないだとか、そういうこと考えずに自由に買い物できるなんて初めてのことだ、わくわくしちゃうつものだ。こつちの世界で散財したのなんて、せいぜい童たちにあげる大量の果物くらいだったし。

それはそれで必要経費なんだけどね。

「まあね……うん、元気だよ、もう」

アルベールとレオンのおかげで、とは言えなかった。自分からそんな甘いことを言うのはまだ抵抗がある。言わなくなつてふたりは勝手に甘い空気を醸し出すし、無駄な抵抗かもしれないけれど。

「……街に行くのは久々でしょう、はぐれないように近くにいてね……手でも繋いでおこうか」

「やだよ、そんなエディーみたいなこと」

そう返しながらもぶいと顔を逸らすのは幼子の仕草のようだ、と自分でも思った。その証拠に、漏れた笑い声と頭上に降るキスは幼子をあやすそれそのものだ。

アルベールはどういうつもりでそんなことをするのだろう。エディーにするのと同じものなのか、それとも……

「着いたみたい。どうしようか、すぐに終わらせるけどイヴも店に来る？」

会話をしていたら街にはすぐに着いた。馬車から降りながらアルベールが手を差し出す。そんなことをされたら、一緒に店に入るに決まってるじゃないか。

最初の店は酒屋だった。酒屋といえど、やはり日本のものとは違うだろうことは行ったことはなくともわかる。

ずらりと並んだ樽なと瓶、暗い店内に強いアルコールの香り。匂いだけで酔いそうだ。

厳しい法律だらけの日本と違い、こちらの世界はまあ緩い。飲酒が許される年齢は十六だか十八だか一応決まってるはいるけれど、そんなのは飾りのようなもの。

十八歳のイヴはもう許される年齢だったが、まだ口にしたことはなかった。父さまにワインを勧められたこともあるけれど、なんとなく断っていた。

伊吹の感覚的に二十歳までは駄目な気がしていたのと、自分はそんなにアルコールに強くないだろうと想像していたからだ。伊吹の両親の酒癖はあまりよくなかったから。

店内で勧められた試飲を笑顔で断ると、代わりに葡萄酒ぶどうジュースをいただいてしまった。これがワインになるのだろうかと考えると、少しおとなの気分のような、そんなことを考えるのがまだこのもの証拠のような苦い気分になる。

「美味しい？ それも買つていこうか」

「うん、エディーが喜ぶかも……それ全部買ったの？ すごい量」

運ばれる樽の数を見て驚いた。いくつかは馬車に載せ、残りは屋敷まで配達を頼んだようだが、馬車に載せるものだけでも相当な数ある。

遠征がどのくらいかかるかわからないけれど、数日分と考えるとおかしくないのだろうか。いや、やっぱり多いと思う。もしかしたら全部は持つていかないのかな？

そんな疑問に答えるように、父さまに頼まれた分もあるからね、とアルベールが苦笑した。なるほど……いやそれでも多いと思う。

お酒に対していい思い出はそんなにない。父さまが暴れたり暴言を吐いたりする姿を見たことはないが、飲みすぎよりは控えてくれたほうがいい。健康で長生きしてくれなきゃ困る。

「アル兄さまがお酒飲んでるところ、あんまり見たことないかも」

次の店は数軒隣なので馬車ではなく徒歩で向かう。アルベールはおれを見下ろしながら、それはそうだと頷いた。

「イヴとエディーの前ではね」

「おれたちが飲みたがらないように？」

「それもあるけれど。ほら、何かあった時に酔っていたら、うまく対処できないでしょう」

「……そんな危険などにはいないから」

家でくらしい気にしなくてもいいのに。もしかして、あまりお酒強くないのかな。

そんな配慮とおれたちのことばかり気にかけてくれる気恥ずかしさから、ふーん、そっか、なんて素っ気ない返事しかできなかった。

前までなら、なんて優しい弟想いの兄だろう！ と感動していたに違いない。けれど隠された下心を知ってしまった今となつては、ただ頬が火照るだけだ。

「次はここだけど……イヴは外で待っていてもらえる？」

「え、一緒に行くよ」

「ううん、頼んでいたものを受け取るだけだから。店内は広くないしね」

そう言われたら、邪魔にしかならない冷やかしの客であるおれは駄々を捏ねられない。店に入っていくアルベールの背中を見ながら、咽る幼いイヴを思い出していた。

アルベールが消えた店は、葉巻や煙草などを取り扱う店だ。

味の違いなんかは吸ったことのないおれにはわからない。けれど周りの煙で咽て泣くことももの頃のイヴの記憶も、両親の煙草に眉を顰める伊吹の記憶も、どちらもある。

煙は息苦しくなるし、残り香は溜息を吐きたくなるし、吸い殻が水に浸かっていたらもう最悪。愛莉が間違つて口にでもしたら危ないから、灰皿を綺麗にするのはおれの役目だった。

ただ成長した今はそんなに気を遣わなくなつていいのに。そう思いながらも、つい口元が緩んでしまう。大切にされているのがわかるのは気恥ずかしいだけではない。

店の前に迎えに来た馬車に先に乗り込みアルベールを待つ。

ものの数分で出てきた彼は馬車に乗り込む前に、くん、と自分の香りを嗅いだ。大丈夫だよと笑うと、気になつちやつてね、とアルベールはわずかに情けない表情をして馬車に乗った。

「店主がちょうど吸っていたところでね……あの匂い、イヴは苦手でしょう」

「別に臭くないよ」

「イヴに泣かれたら困るからね」

「もうそんな歳じゃないよ！」

アルベールの中には、まだわあわあ泣くような小さなイヴが残っているのかもしれない。

アルベールはそうだねと笑い、そつとおれの手を覆った。馬車の中だ、はぐれないように手を繋ぐ必要はないのに。慣れた行為ではあつたけれど心臓がばくばくする。この手を握り返したほうがいいのだろうか、ふざけないでと払ったほうがいいのか。

まあそんな心配は必要ない。歩いたほうが早いのではというほど店が密集する街中だ。目的地までは喧嘩をする暇も甘い空気になる暇もどうせない。

「あ、今度は甘い匂いがする。お菓子の匂いだ」

誤魔化すようにアルベールを押しつけて馬車を降りた。

先程までのアルコールや煙草の匂いとは違って、深く吸い込みたくなるような甘つたるい香りがある。外からでもわかるくらいに店内には色とりどりの華やかなお菓子が並んでいた。まるで絵本や映画に出てきそうなお店は、今日いちばんの興奮に繋がった。

数年も街に出なければ立ち並ぶ店は大きく変わる。昔来たときはこのお店はなかったはずだ。

「うわー、わ、すごい！ エディーが喜びそう……いや連れてきたら興奮して大変か。母さまも好きそうだね……あつ、チョコレートあんなに種類あるの!? 美味しそう！ キャンディーの棚もいろいろある！ ねえ早く入る——ねえ、アル兄さまなんで笑ってるの？」

アルベールの袖を引いて催促する。震える肩に気付いて理由を訊くと、だって、と彼は楽しそうに口を開いた。

「さつきからずっとエディーの話ばかり」

「だってその……留守番させてるしさあ」

「エディーもだけれど、お菓子を目を輝かせるイヴがかわいくて」「だって！」

生前は洋菓子店に入ったことはないけど、前を通りかかったことくらいはある。綺麗で美味しうだけれど、手が出せない結構な値段。

ただ、伊吹だった頃はこんなにカラフルな店なんて見たことなかった。イヴの幼い頃の記憶だつてこんなに多くの種類を並べる店はなかった気がする。わくわくするのは仕方ないだろうか……

「どれが欲しいの？ 食べられる範囲ならなんでもいいよ、買っていいこうか」

おいで、と腕を引かれて店内に入った。

当然ながら外よりもっと甘い香りでいっぱいだった。小麦とバターの香りのクッキー、ショークースに並ぶいろいろな形のチョコレートに、クリームでデコレーションされたケーキ、大きな瓶に入った鮮やかなキャンディー、かわいらしくラッピングされた焼き菓子と小瓶で並ぶジャム。

ひとつひとつ確認しては、このジャム欲しかったやつ、これはブラウニーだって、マシユマロもあるのかあ、とアルベールに報告をし、彼はいちいち相槌あいつちを打ってくれた。

と、そこでハツとして、おれは頭を振った。

「いや！ 違う違う、自分のばつか探すんじゃないよ！ えっと、こういうの、遠征に持っていくには日持ちしないよね……キャンディーとかなら大丈夫かな？」

「そうだね、母さまがクッキーとかの焼き菓子を持たせてくれることはあるけど」

ついつい食べたいものばかり考えてしまったけど、今日は遠征のための買い出しだった。遠征に日持ちしないものを持つていくことはできない。

この世界のお菓子は、前の世界のものとは比べたら保存に向かないものばかりだ。持っていけそうなものは、砂糖や塩がたっぷり入ったものくらい。

おれは慌ててキャンディーの瓶が並ぶ棚にアルベールを連れていった。

店員が瓶から袋に詰めていく、からからこころかちん、という音を聞きながら、アルベールの遠征前にいつもばたついている母さまを思い出す。使用人と大量の焼き菓子を作っては包装し、マリアの背に載せていた。きつと一日でも長く楽しめるように出発直前に用意していたのだろう。

「……それ、おれも手伝わたら嬉しい？」

「いいよ、無理しなくて」

口にした後で、何を少女漫画みたいな恥ずかしいことを、と思った。そして返ってきた言葉に、なんで？ と思つてしまった。

アルベールなら、イヴが作ってくれたら嬉しいと言うと勝手に思っていたのに。

ぼかんとしたままのおれに、アルベールはにこりと笑いかけた。

「イヴが作ってくれたものは他の団員に譲れないから」

予想もしなかった答えに、思わず何言つてるの、と肩を叩いた。アルベールのほうが洋菓子店より甘つたるいかもしれない。

「もー、そんなことばかり……あ、これエディーがすぎなやつ。これも買ってこ」

「母さまにはこれをお土産にしようか。イヴはチョコレートが欲しいのじゃなかった？」

財布の中身と相談せずに欲しいものを次々と選べることの楽しさったら。

量り売りのキャンディーも、一粒いくらのチョコレートも、口に合うかわからないお花の砂糖漬  
けとやらも、すぎなだけ買える。

もちろん消費できる範囲内だ。

「薔薇のジャムだつて。ローズヒップと……ベリーも入ってる。へえ、美味しいのかな？ お花の

ジャムつて他にもあるんだね。あ、蜂蜜もある」

「気になる？ ひとつ買って——」

「ね、レオンさまつてこういうの食べるかな？」

「ああ……」

アルベールは少し考えて、そうだねと微笑んだ。

「イヴが選んだものなら、なんだつて喜ぶと思うよ」

薔薇といったらレオン、というのは突飛だっただろうか。おれの中ではすっかりその図式が出来  
上がっていたから。

「じゃあ買ってこつと。アル兄さまもいる？」

「母さまが喜ぶんじゃないかな」

「じゃあ、もーいつこ！ はあ、綺麗な瓶。帰り道で割れないようにしなくちゃね」

早く帰って皆の喜ぶ顔が見たくなって、店員さんにこれください、とお願する声も元気になる。  
そんなうきうきする気持ちと同時に、愛莉にも美味しそうなケーキをすぎなだけ買ってあげた  
かったなと考えてしまった。どれでもすぎなお菓子を買っていいよつて、遠慮しなくていいよつて  
言ってみたかった。

そんなことを考えたつてどうしようもないとわかっているけど、楽しいことと愛莉を思い出す  
のはいつもワンセットだ。エディーを甘やかすのと同じように、愛莉ももつと甘やかしてあげた  
かった。

「イヴ、買い忘れない？」

「……あつ、うん、大丈夫」

開いた扉を支えながら呼ぶアルベールの声にハツとして追いかける。ぎゅつと抱えた買い物袋が  
酷く重く感じた。自分ばかりがしあわせなんて、兄失格なよううで。

「疲れちゃった？」

アルベールは馬車に乗り込む前におれから袋を取り上げると、心配そうに顔を覗き込んできた。

大丈夫だよと取り繕うように笑顔を向けると、疲れたら馬車の中で休むか、先に帰つていてもい  
いからね、と彼は頭を撫でる。

まだ街に着いて一時間も経つてない。本当にまったく、これっぽっちも疲れてない。アルベール  
におれができることつて、本当に何もなし。唯一の能力だつて今は使いどころもない。マリアで街

に来るわけにはいかないし。

「あと少しだから。終わったら冷たいものでも買って帰ろうか」

「いいよ、ゆっくりしたって」

「これ、早くエディーにあげたいなって思ってるでしょう」

これ、と指さされたアルベールの腕の中にある袋は、とても軽そうに見える。

中身は焼き菓子やチョコレートだ。キャンディーや瓶ジャムといった重いものは、すでにアルベールが馬車に積んでいる。だから本当にその袋の中は軽いものしかないのだけれど、なんだか安心した。ほんの少し、赦される理由をもらった気がしたのだ。

「でもせっかく街まで来たんだもん、もう少しゆっくりしたいな。アル兄さまとふたりだけで出かける機会ってそうないでしょ」

よいしょ、と先に馬車に乗り込む。アルベールの腕を引いて上がらせて、ぱたんと扉を閉めた。

「……デートだって言ってたじゃん」

自分で言いながら恥ずかしくなる。こんなこと言うつもりはなかったのに。

伊吹はもちろん、イヴだってデートらしいデートをしたことはない。まともに成立していなかったジャンとの茶会がそれだとしたら首を捻る。

ジャンは大体どつかに行ってしまった、ひとり残されたイヴの相手をするのはレオンだった。

そのレオンとの続きの茶会だって、先日の三つ子の童を湖に連れて行ったことだって、デートというには……いや、あれはデートなのかなあ。

でもあれがデートになるなら、アルベールにも幼少期からずっと遊んでもらっていたわけで……デートの定義ってなんなのだろう。

「そう思ってくれているのなら、もう少し嬉しそうにしてくれると僕も安心できるのだけけど」

額に降ってきたのは、もはやお約束になりつつあるキスだった。宥めるような、でも懇願するような、そんなキス。

おれが曖昧な態度を取ると、ふたりを不安にさせてしまう。おれだって、せっかくおれを愛してると言ってくれたひとたちを不愉快にさせたいわけじゃない。

「ごめん……嫌なわけじゃなくって、その、ちよつと、その……エディーを置いてきたことに罪悪感があっただけ」

愛莉を残した罪悪感、とは言えないからエディーを言い訳にしまった。

まるきり嘘というわけでもない。きつとふたりで街に行ったなんて知ったら、あの子は怒り出すだろう。

「その分お土産はどっさり用意しなきゃね」

そう言ってお土産はにっこり笑った。

その言葉通り、お土産の量はすごいものだった。

あれくらいの小さい子はすぐに大きくなるからと服に靴にと買い込み、また違うお店で甘味、飲み物、ぬいぐるみに雑貨を買った。もちろん両親にも。馬車の中はほぼエディーのものでいっぱい

いだ。

とその時、覚えのない箱を見つけて、これなんだっつけ、とアルベールに訊く。すると、それはイヴに似合うと思つて、とアルベールが微笑んで答えたものだから、そうかこれはデートだった、と思ひ直した。いつの間におれのものまで買つていたのだから。

その後は、お祭りの屋台のようなお店でレモネードや串焼きを買つてもらい、上機嫌でそれらを胃に収めていく。

貴族の振る舞いとしては、はしたないだとか危ないだとかと注意されるかと思つたけれど、アルベールは止めないし、竜騎士団長だと気付いているであろう店員や客たちも何も言わないので、こつやつて過ごす貴族の若者は多いのかもしれない。

どちらにせよ、イヴの幼い頃の街の記憶しかないから、今時のことがわからなかった。流行りのお店や食べ物もあるのだろうか。

「あらあ、アルベールさまじゃないの。今日はお買い物？ 先日頼んでた本、届いてるわよお」  
「本当ですか、随分と早かったですね……イヴ、少しいいかな」

おいでおいでと手招きするふくよかな女店主を見て、アルベールはおれを振り返り、頷いたのを確認して店の中に入つていった。

本屋だとしたら飲食物の持ち込みはご法度だ。追つて入るわけではないけれど、慌てて残りのレモネードを飲み干した。

きつとアルベールは、イヴを待たせるわけにはいかない、とすぐに出てくるだろう。

でも滅多に出ない街まで来て突つ立っているのもつたない気がして、おれはアルベールが戻つてくるまでの間、隣の店を覗いてみることにした。

ドールが並んでいるけれど、玩具屋つて様子でもない。どうやら雑貨屋のようだ。何かいいお土産が見つかるかもと期待して扉に手をかけた。

からん、と鈴の音が鳴り、奥からいらつしやいと女性の声がある。その声に思わず失礼します、と小声で返事をしてしまつたけれど、おそらく店主まで届いてはいないだろう。

心持ち薄暗い店内には、外から見えていたドールやアクセサリーが並ぶ。宝石店のような高価なものではなく、普段使いの手ごろな価格のもの。母さまに贈るにはその……貴族やおとなの女性向けではないかな。リボンや花モチーフの、街の若い女性が好むものが多いかもしれない。

愛莉に似合うのは……と考えて、首を横に振つた。持つて帰れるわけでもないし。

アクセサリーに比べると、ドールは少々値が張るようだ。これも女の子なら喜ぶかもしれないが、母さまとエディーのお土産にはならないな。……もう充分すぎるほど購入しているけれど。

遠征に持たせるようなものもないだろうし、冷やかに入つただけになつちやつたな、と店を出ようとした瞬間、出口近くにあつたアクセサリーと並ぶ石が視界に入つて動きを止めた。

「……宇宙みたい」

「うちゅう？」

おれの声に反応したのは、いつの間にか隣にいた母さまより少し若い女性だった。

長い髪を束ねたアクセサリーから、おそらく店員だろうと気付く。先程似たようなものを見たば

かりだ。

「あ、えっと、ちが……そら……ほし、星みたいだなって」

「あら、そう、そうなんです。この色なんて特にほら、星空みたいで綺麗でしょう」

嬉しそうに微笑んだ彼女は、これは魔力を込めてるのよ、とふたつの石を手に取って見せた。濃紺の石の中にきらきらと光るラメのようなものが入り込んだ石と、ただ赤いだけの石だ。

「元はこつち。何もない石なんだけれど」

赤いだけの石を指し、次に濃紺のきらきらの石を指す。

「魔力を込めるところなるんです。この石をペンダントにしたり髪飾りやブローチにしたりして贈ることが多いんですよ」

「魔力を込める……」

こういう感じ、とお姉さんがきゅっと赤い石を握りしめ、数十秒ほどして中の石を見せてくれた。濃紺の石ほどではないが、ほんの少し点々と煌めいている。

魔力の少ない者で数日、魔力量の多い者ならひと晩もすれば、この濃紺の石くらいの煌めきになるといふ。

実験みたいで面白い。値段も宝石と比べたら高いものではないが、ほいほい買える値段でもない。ミシャール家の財力で言えばいくつだって購入できるけれど、おれとしてはこれはお小遣いの範囲外だ。

残念だけど諦めようかな、と思ったところで、お守りのようなものなんです、というお姉さんの

言葉で思わず振り返ってしまった。

「お守り？」

「ええ。この石は希少なもので、昔から贈り物に使われていたの。魔力を込めて、お相手のしあわせを願ったり、無事を祈ったり。魔除けとしても使われていたようです」

無事を祈る、という言葉にハツとする。

今でこそ竜のおかげで平和なこのハデイス国も、昔はそれなりに戦争があった。無事を祈るために何かに頼りたくなるのは今も昔も同じなのだろう。

「アルベールさまは遠征によく行かれますからね。お守りにどうでしょうか」

「えっ」

アルベールが傍にいないのにそれがわかるということは、イヴのことを知っているということだ。驚いて顔を背けると、くすくすとお姉さんは笑った。

「イヴさまはもう覚えてないでしょうね。うんと小さな頃だったから。昔は少し変わった宝石も扱っていて、お母さまとよくいらっしやっていたのですよ。お母さまが店主とお話しなさってる間、娘の私がよくイヴさまとお話をして待っていたのですけれど」

もう十何年前も前のことですから、覚えてなくても当然でしょうね、と話すのを聞くと、おそろくアルベールが養子になる前のことだろう。記憶にあるようなないような。

大きくなりましたね、と母さまに似た年齢の女性に言われるとむず痒い。

その時、からん、と入り口が開く音がして、お姉さんはそちらを振り向いた。その隙にそっと石

を突く。手に持つと勝手に魔力を注いでしまいそうで怖かったから。

お守りか。アルベールは喜んでくれると思うけど、そこに至るまでがなんだか少女の考えのようで気恥ずかしい。

伊吹には縁がなかったけれど、部活の試合のためにマネージャーが選手にミサンガやぬいぐるみを作っていたのを思い出す。それと近いものがあるんじゃないか。

今回の遠征は危ないものではないと言っていたし、用意するのは大袈裟かな……

「それが欲しいの？」

「わっ」

急に話しかけられて驚いた。振り向くまでもなくアルベールの声だ。先程店内に入ってたのは彼らしい。

ばくばくしたままの心臓を押さえながら、お、お守りなんだって、とどうにか口にする、これかあ、と背後からアルベールがその石に手を伸ばした。魔力を込めないようにと注意する暇もなかった。魔力のコントロールがうまいアルベールには無用の心配だろうけれど。

「これ、魔力を保存できる石だね。僕が遠征に行ってる間のお守りとして、イヴに持たせておくかな」

「違うよ、逆！」

「逆？」

「おれがアル兄さまに……その、無事に帰ってこれますようにって、お守りに……でもいらない

か——」

「欲しい」

否定したおれの言葉に、食い気味の言葉が返ってきた。わかった、と思わず頷いてしまうほどの勢いだった。

喜ぶのはわかっていたけど、そんなにかあ、と恥ずかしい反面、やっぱり嬉しくもある。

「えっとあの、これ……お守りってどうやって選ぶんですか？」

並んだ石は色も形もさまざまだ。粒のような小さなものから、指先で輪を作ったくらいのもので、色も、漆黒のものから硝子ガラスのように透明なものまである。

宝石ほど高くはないとわかっていながらも、ついいちばん大きなものの値段を先に確認してからお姉さんに訊いた。

「そうですね、贈られる方の瞳の色に合わせることが多いですよ」

なるほど、と思った。元の世界と比べて、二次元から飛び出したような髪や目の色が多いこの世界ならではの選び方だ。

アルベールの瞳のような真っ黒な石は見慣れたものだけれど、その分きらきらも映えるというものの。まさに小さな宇宙のようなものができるのではないか。

「アル兄さま、手、貸して」

「うん？」

背後から彼の腕を引いて、真っ黒の石を手首に当ててみる。

プレスレットって感じじゃないなあ。手首や指だと剣を振るのに邪魔そうだ。懐中時計に小さな石を……それは女子高生がデコったみたいでアルベールには似合わない。

振り返って彼の胸元に当てて、これも違うな、と思った。当然女性のように髪飾りも必要ないし、ピアスにしても穴が開いてない。そもそもアルベールはアクセサリーを着けるタイプじゃない。「うーん、何にしてもらおう」

「イヴ」

「タイピンとか……でも遠征の時にネクタイは使わないか。ていうかあまり目立たないほうがいいかな。お守りらしく小さな袋に入れて持ち歩いてもらうとか……わざわざ持ち歩くの面倒だな」

「……イヴ」

「あつ、ペンダントにしてもらうのはどうかな？ それなら普段は服の下に隠せるし、面倒でも邪魔でもないよね？ そうだそうだ、ペンダントにしよ、ね、どう？」

「イヴ、嬉しいけど……ちょっと近いかな」

「へっ？」

くすくすとお姉さんの笑う声が聞こえて、そこでやっと自分がアルベールにびったりくつつきながら確認していたことに気付いた。

慌てて距離を取ったけれども遅い。傍から見たらただの仲の良い兄弟にしか見えないと思うけれど、珍しくアルベールは頬を染めて困ったような表情をしていた。

「では今から研磨してペンダントトップにいたしますね。……そうですね、明日にはお屋敷にお届

けできるかと思えます。イヴさまなら、それから魔力を込めても十分遠征に間に合うかと」

翌日発送翌日到着。ネット社会もびっくりのなんて迅速な対応だ。

おれはお姉さんに、お願いします、と頭を下げて店を出た。なんだか今日ちばんの達成感がある。

だって心配ないなんて言われたって、やっぱり心配しちゃうよ。アンリも、この先どうなるかわからない、って言ってたし、アルベールの予知能力だってすべてが見えるわけじゃない。

お守りを全面的に信じるわけじゃないけど、信じたいと思うのは神にも縋りたいほどだいたいじなひとがいるからだ。



「いいいやあだあ、あるにーさまはきよおもえでいといのー！ やーあー！」

やだやだ行っちゃやだ、一緒に寝るの、一緒におやつ食べるの、一緒に遊ぶの、とエディーが泣き喚く。昨日も同じ内容で喚き、ちゃんと話がついたにもかかわらずだ。

とかいうかここ数日、同じような我儘ばかりだった。母さまが徹夜で作った遠征用の焼き菓子を頬いっぱい食べた後も、泣き止むことはなかった。これくらいの幼いこどもを説得なんてできるはずがないけれど。

結局母さまが大泣きするエディーを抱え、見送りはお願いね、とおれに言い残して、父さまと屋

敷の中へ戻ってしまった。忘れずにアルベールにひとつキスを残して。

今日は竜騎士団の遠征が始まる日だった。早朝から家族全員でわざわざアルベールを見送るのは、エディーがそうするんだと譲らなかつたから。もとよりおれはそのつもりではあつたけれど。

エディーは遠征を報告された日に泣き、思い出しては泣き、日にちが近付いてからはまた駄々を捏ねるように泣き、大きな丸い目が溶けて、小さな体から水分という水分が失われてしまうのでは、というくらいたくさん泣いた。

おれだつてさみしいとは思つていたが、エディーがあまりにも泣くものだから、泣けなかつた。アルベールと一緒に、大丈夫だよ、すぐに帰ってくるよと慰める側になるのが年上の役割だ。

「癩癩かんじやくを起こしたかのような泣きっぷりだ」

思わずそう呟くと、アルベールは肩をすくめた。

「毎回あれだけ泣くのですから、遠征の話は伏せたほうがいいのかもしれないと思つてしまうのだけれどね」

「アル兄さまがいないとわかつたら、皆が止めても屋敷中捜すような子だよ、話したほうがまだいくらかまじだよ」

「ふふ、エディーは僕のことかだいすきだねえ」

アルベールはくすりと笑い、それからおれに視線を移した。目を細め、撫でるように頬に触れる。「イヴもだもんね？」

「……！」

慌てて周りを確認してしまった。

まったくアルベールときたら、元々イヴとエディーに特に甘い兄だったのだけれど、あの夜からおれへの態度が、さらに甘つたるいものに変つていた。かわいらしい弟への態度から、愛しい恋人へのそれに。いや、恋人にしたつて甘すぎるとは思うけれど。

あの時はアンリの能力のせいで頭が馬鹿になつていた。ふたりがすき、欲しい、気持ちよくなりた、そんなことばかりで。

とはいえ、アンリの能力の作用が収まつた後、それがすべて嘘です、とはならなかつた。もともとふたりへの好意はあつたし、今もちゃんとすきなままだし。なんならフィルターでもかかつているかのように、ふたりがさらにきらきら輝いて見えている。

愛莉の持つていた少女漫画の中に、恋をすると世界が輝いて見えるというシーンがあつた。あの日の翌朝から、こういうことか、とわかるくらいにはおれも浮かれているようだ。

それでもさすがに、恋に溺れて周りが見えなくなるほど馬鹿ではないつもりだった。周りに見られたら恥ずかしいとか、それ以前に許されない行為だとか。

でも当の本人たちが許しているわけで不貞行為ではないし、アルベールは養子だから近親相姦きんしんそうかんのような禁忌きんきでもない。レオンはアルベールのこともおれのことと愛してると言うし、アルベールだつて同じだ。

つまりイヴは略奪したのではなく、ふたりの間に割り込んだような……というか、取り込まれてしまったというか。

そんなわけで、アルベールとレオンから愛されることに対してはもうそれでいい、それがいいと受け入れてしまった。アンリの望む展開になっていると思う。

多少、アンリに強引に仕向けられたきらいはあるけれど、アルベールとレオンの執着を見ていると、なるようになったな、という着地だった。

これがゲームなら、あの夜で終わっていたのかもしれない。けれど残念ながらゲームの世界ではなく続きがある。結ばれてめでたしめでたし、では終わらない。

レオンとアルベールは婚約者のままで、イヴはアルベールの弟のまま。結局褒められるような関係ではない。

この状態が、周りにばれたら――

イヴはともかく、第一王子のレオンと竜騎士団長のアルベールの立場を考えると……頭が痛くなる。でもそんなことを考えているのはおれだけなのかな。アルベールもレオンも、おれへの甘ったるさを隠す気がないみたいだし。

ふたりでいれば腰を抱き、人目がなければ頬にキスを落とすし、おれが何か言えばひとことだって聞き逃さないとやわんばかりに、愛おしそうに目を細めてじい見つめてくる。

誰もいない室内ならともかく外でそれをするものだから、誰かに見られないかとひやひやしてしまふのは、やっぱりおれだけなのかもしれない。

頬へのキスも、抱きしめることも、この世界ではよくあるスキンシップで、挨拶のようなもの。でもアルベールの表情は、明らかに弟に向けるものではない。

一応ここは屋敷内で、見送りは家族だけでと気を遣った使用人も、絶対に見ていないとは限らない。

ふたりはもう少し、自分たちの立場を考えるべきだと思う。うちの使用人が悪い噂を流すとは思わないけれど。

「長くても十日くらいだっけ」

「そうだといいいけれど」

自分がイヴだと気が付いてから、これまでずっと傍にアルベールがいた。姿が見えなくても演習場か、レオンの近くにいると思えば不安はなかった。

けれど自分が知らない、しかもすぐに会えないようなところに行くとなると、やっぱり心配になる。

そしてアルベールも同じく、いろいろと心配していた。イヴのことだったり、家族のことだったり。とくに自分がしばらく屋敷を空けることで家族を守れないと悩んでいるようだった。

もともと彼は家族をだいじにするあまり、家族のことでは予知能力がうまく働かない。

事件というのはそんなに簡単に起こらないし、予知がなくなつて竜がいなくなつて、心配なんていらない。おれだつてこんなんだけど男で、父さまだつている。きつとレオンも助けてくれる。心配するべきは、アルベールのほうなのに。

竜騎士が遠征に行くことは、それはつまり危ないところに行くということ。

……怪我とか病気とか、死んじゃつたらどうしよう。

アルベールの予知があるから、そんなことは起きないのかもしれない。でも予知は予知であって、避けられなきや予知の通りになってしまう。避けたことで、より悪い事態になってしまう可能性だつてある。

「無事に帰ってきてね」

「お守りももらったし、もちろん」

アルベールは微笑みながら、服の上から自身の胸元に触れた。

両親とエディーの前で渡すのは気恥ずかしくて、お守りのペンダントは昨晩渡していた。

漆黒の石の中にきらきらの魔力が浮かび、宇宙を閉じ込めたようなすぐ綺麗で満足するものになったと思う。

実際に、だいいじそうに受け取ったアルベールの黒い瞳も同じように輝いていた。

「嬉しいけど……イヴにしばらく会えないことが、いちばんきついかな」

「……そう」

「レオンさまが羨ましいな、と言ったら怒られてしまうかな。普段は僕のほうがイヴを独占する時間が多いものね」

レオンさまと仲良くしても僕のことを忘れちゃだめだよ、と駄目押しキスの額に落ちる。唇にできなかったのは、今更ながら周りを気にしてくれたのかもしれない。

こんなに綺麗で優しいひとを忘れられるわけがない、きつとおれは、ことあるごとにレオンと比べるだろう。もちろん悪い意味ではなく。

すぐそこで待機していたマリアに視線をやると、彼女はおれが撫でやすいように頭をこちらに寄せた。察しがいいのか、ただ撫でてほしいだけなのか。きつとどちらもその通りだ。

大きな頭を撫でながら、アルベールや他の団員や竜たちをよろしくね、とお願ひする。

マリアはくると喉を鳴らして、絶対にイヴのところにアルベールを返すわね、と返事をしてくれた。

そこに悲愴感はない。自分たちが負けることはない、人間よりずっと強く賢い彼女たちは本気でそう思っているのだ。その自信が今はすごく、心強い。

ご褒美をたんまり用意してマリアのことも待つてからね、と言うと、彼女はもう一度おれに頭を撫でさせ、アルベールを乗せて飛んでいってしまった。

不安なのは遠征のことを知らないからだ。でも足手纏いになるのは嫌だから、ついて行ってもいいかな、なんて言えない。これは仕事であって、旅行じゃない。

詳しくは聞いてないけれど、竜騎士団に依頼が来るほどだから、きつと重要な仕事なのだろう。そんなところに私情を持ち込むのはおかしい。

たった数日離れるだけでさみしいと思うのは、一緒にいることが当たり前になっていたからだ。その当たり前が嫌じゃなくて、安心できる距離だった。

……恋なんてしなないと思っていたけど、少し離れただけでこんなに不安になるほどすきなひとができてしまった。愛されることも知った。でもそれに溺れることはおれ自身が許せない。

あのひとたちと同じには絶対にならなくなかった。

それから二度寝をする気も起きず、朝食を詰め込み、着替え、外に出た。エディーは泣き疲れて眠っているようなので声はかけなかった。あの怪獣を起こしてしまったら大変だ。

大半の竜騎士が遠征に行ったので、今日からしばらくは演習場には新人と留守番組しかいなくなる。遠征に向いてない竜も留守番だ。

竜騎士はいつも演習場にいるわけではなく、街や郊外で何かしらの仕事をするところがあるが、大抵はわざわざ竜騎士に頼らなくても騎士団で解決できるので、彼らと比べると出勤日数は少ない。先日、街で大きな事故があった。王族であるレオンが駆り出されるほど重傷者を多数出した事故で、未だに治療中の者や建物の補修にと尾を引いている。その大きな事故のような、竜の力を必要とすることはそうそう起こらないし、そんなことになったら堪らない。でも必要な時に動けないと困るのだ。

だから彼らは自分を鍛え、竜とうまくコミュニケーションが取れるように触れ合う時間を作る。そのために演習場で鍛錬を繰り返す、というわけ。

今回の留守番組もそうで、決して休んでいるわけではないのだ。だからおれもたまに行って彼らの手伝いをするつもり……役に立っているかは置いておいて。

もうおれも団員だから、掃除や雑用をすると申し出ても以前のように断られないし、アルベールが傍にいたかつて、竜騎士団は自分の居場所になりつつあった。

今日はついでに竜舎にも行こう、こういう時に不貞腐れたり元気がなかったりする竜は多い。竜

舎は演習場より静かで、結構すきだ。きつと甘えん坊の三つ子たちもさみしがっている。

それに、もしアンリに会うことがあるなら演習場より竜舎のほうがよかった。

そうして竜舎に向かったわけだが、アルベールもマリアもいないとなると、移動手段は馬車のみとなる。ぼんやりとひとり揺られながら、早速アルベールとマリアを恋しく思った。

ひとりで馬車に乗ったことなんて、もう数え切れないくらいある。それでも、移動中すらアルベールと一緒にいることに慣れてしまっていたみたいだ。

やっぱりエディーも連れてくれば良かったかな。でも竜舎には少しは楽しめるかもしれないけど、こどもには面白いものなんてあまりないから、すぐに飽きてしまうだろう。アルベールを思い出してまた泣いて騒ぐことも簡単に予測できる。

それにもしアンリが来たら、エディーの前ではできない類いの話になることくらいわかってる。さみしいからって、あんな小さな子を巻き込むものじゃない。

……そんな覚悟をしていたのだが、その日アンリは竜舎に来なかった。まあ、約束なんてしてないし、来ると連絡をもらったわけでもない。

かわりに、帰る間にレオンが現れた。

相変わらず王子の癖に暇だな……と思っただけけど、訪れたのは夕方。仕事を急いで終わらせて来たのかも、と考えて口から出かけた悪態を引っ込めた。

おれに会いたくて、早く仕事を終わらせてこんなところまでやってくるだなんて、嬉しくないわけがない。

結局たいした時間は取れず、同じ馬車で帰ることになった。そこでちょっとした雑談のち夕食のお誘いがあったが、屋敷でまだ拗ねているであろうエディーを思い出して断ると、お前のそういうところはアルベルそっくりだよ、と溜息を吐かれた。

「家族が第一、特に下の子に甘い……まあ俺は、お前の顔を見られるだけでいいんだ」

そう言っておれの髪を撫でて微笑むレオンに安心した。なんでかな、レオンからアルベルの名前が出るどほっとする。だからつい、甘えが出てしまったのだと思う。

「……無事に早くアル兄さまが戻ってくるといいですね」

レオンの肩に頭を乗せてそう話すと、そうだなと返ってくる。その低い声が、いつもどうにかしてくれそうで安心するんだよなあ。

ふわりと香る花のにおいに、そういえば、と思い出す。いつも約束がないままレオンが会いに来るからせっかく買った薔薇のジャムも何も用意できず、屋敷に置きっぱなしだ。

明日からは用意しておこうかな。街に出たときのお土産を渡すだけのためにわざわざ王子と約束をするのはおかしい気がするし、面倒でも用意しておいたほうがさつと渡せる気がする。

……どうせこのひとはまたおれに会いに来るんだろうし。

そんなことを考えている間に、屋敷に着いてしまった。

「帰り道はあつという間だな」

「送ってくださってありがとうございます」

「いや、これは俺の我儘だからな。少しでもお前の顔が見たかったんだ」

馬車を降りる前におやすみ、と頭のとっぺんと頬にキスが降る。アルベル同様、挨拶のようなキスだ。

ひとつ違うのは、ひよい、とその綺麗な顔を指さしてお返しを要求してこること。されることは慣れつつあるけれど、自ら唇を突き出すのはまだ慣れない。

ちゅつとすぐに離れる小鳥のようなキスでも、レオンは満足そうに笑ってくれた。

ほんの少しの疚ましさからこっそりと屋敷に戻ると、目元を真っ赤にしたエディーが飛びついてきた。

イヴ兄さまも置いてったと思った、と泣くエディーを慰めながら、その日は一緒に風呂に入り、エディーにとっては少し遅い食事をとり、しがみついて離れない彼を抱きしめて眠った。

小さくてかわいイヴの弟、さみしがり屋で甘えん坊の末っ子。

ついついアルベルやレオン、両親といると自分が甘えてしまうのだけど、エディーだけは別だった。当然だけど、この子は守ってあげなきゃ、と思うのだ。

そしてやはり、愛莉の泣き顔を思い出してしまう。

一緒に寝なくなったのはいつ頃だったかな。

母さんにはばれないようにこっそりとおれの部屋に来て、おにーちゃんと寝る、とよく潜り込んできた。小さな妹を拒否できるはずがなく、少し寝相の悪い愛莉を抱きしめて寝たものだ。

今腕の中にいるのはエディーだ。泣き疲れては眠ってを繰り返していたと母さまに聞いたけど、

それでもずっと眠りにつく彼を見ると、こどもはよく寝るなあと感動すらする。

自分も寝ようと瞼を閉じると、出てきたのは腕の中ですねと鼻を鳴らすエディーではなく、なんぞ置いてったの、と泣く愛莉の姿だった。

——戻ってきて。愛莉のこと置いてかないで。ひとりにしないでよ、おにーちゃんですよ、なんで愛莉のこといちばんにしてくれないの……ずるいよ、愛莉のおにーちゃんなのに。おにーちゃんがそんな理由で死ぬなんて許さない、死ぬ時は愛莉のためじゃないいやだ！

……いくらなんでもそんな我儘な子じゃなかった。けれどなんだか胸が痛くて、起きてからも泣きじゃくる愛莉の表情が脳裏から消えなかった。夢なのに、夢じゃないようだった。

すやすやと隣で眠るエディーを見下ろし、涙の跡が残るふくふくとした頬を撫で、それでも思いうすのは愛莉のことだった。

エディーもかわいくて、だいじな弟だ。笑っていてほしい。比べるのはおかしな話かもしれない。この場にいないから。

長く一緒にいたから。

向こうにひとり、あの子だけ残してきてしまったから。

愛莉のことだけが、心残りだった。

おれはたぶん、どちらかの世界を選ばされたら愛莉を選ぶのだと思う。



竜騎士団員が遠征に行つて三日目。

今日は先に演習場に行き、昼食を留守番組と一緒に済ませ、片付けまでしてから竜舎へ向かった。正直竜舎に行つてすることといえば、もう三つ子の世話くらいしかない。

ぶすくれていた他の竜は、演習場で頑張つてくれるくらいにはやる気を取り戻したし、もともとやる気のない竜はいつも通り静かに寝ている。

はなから戦闘要員として数えられてない三つ子だけが、いつもと変わらず元気だ。自分たちは役に立たないんだー、なんて拗ねも責めも当然しないし、なんならいつもよりおやつ分け前が多いやつたー、と喜んでる。

構つてくれる先輩竜たちがいないのはさみしかつたようだけど、普段からいないことも多いからすぐに慣れていた。むしろおれが普段より遊んでくれるから嬉しいと言っていた。

……そんなに遊んでやる気はなかつたけれど、そこまで喜ばれると、竜舎には来なくてもいいかも、と思えなくなつたじゃないか。

人間よりも竜のほうが素直で嘘も吐かない。それがわかつてる上でイヴ、イヴ、と無邪気に名前を呼ばれると、大抵のことは許してしまう。

今日も元気におにごっこよろしく竜舎の周りを走り転がり、抱っこねだり、おやつを食べると甘え、一頻り騒いだ後で日向ぼっこ！ときゅいきゅい鳴く。

連れて行かれた今日の日向ぼっこスポットは木陰の下だ……日向ぼっこではなくお昼寝スポット

立ち読みサンプル  
はここまで

だろう、そこは。

まあ休むにはいい場所だ。竜舎がよく見えるし、演習場のほうから団員の声出しも聞こえる。そよ風が気持ち良くて、かすかに果物の香りもする、あたたかくて眠気を誘う場所。

んん、と伸びをして腰を下ろすと、膝の上に竜が一匹乗り、太腿を内側に押すように二匹体を寄せてくる。相変わらず猫みたいな子たちだ。

撫でてとねだられるまま小さな額や喉の下を撫でてやる。三匹もいたらかたよ偏らないよう撫でるのも大変だ。

食後の運動の後の、穏やかな時間。

ついうとうとしてしまうのは仕方ないと思う。

「んんん……」

自分の唸り声で目が覚めた。なんだか違和感があった。

膝の上には無理矢理膝に乗ってきた竜があわせて二匹、肩口には少し幼い綺麗な顔——それに気付いてびく、と肩を揺らすと、綺麗な顔の持ち主が小さな唇からうん、と息を漏らした。

アンリだった。

そのうち会うだろうと思っていたし、別に彼の傾向からしてここに来るのも不思議ではなかったけれど、会う時はいつも驚かされている気がする。

「んー……おはよお、早いよお……ぼくまだ寝たばっか、だったのに……」

「ちよ、この状態でまた寝るとか」

「起きる……起きるからちよっと待ってえ……」

アンリはぎゅううとおれの腕にしがみついて、寝起き特有のぼやぼやした声で甘えてくる。攻略キャラクターたちにとって、こういうところがかわいいのだろうか。

「イヴさまいいにおいする……おひさまのにおい……」

「……寝る前までこの子たちと走り回ってたから……あ、うわ、汗のにおいするかも」

「んふふ、皆イヴさまのことだいききなんだねえ……」

アンリの膝にも一匹丸くなって寝ている竜がいる。彼は右手でその子の頭を撫でて、ぼやぼやとそんなことを呟いた。

イヴは竜に愛されるような行為をしているわけじゃない。誰だって自分をわかってくれるひとに懐くというだけだ。

おれが、ずっとアンリを敵かもしれないと思っていたのに、向こうの世界でもイヴのことを考えていてくれたと知って、恐怖心がなくなったように。

陽に透ける柔らかな猫っ毛と、伏せた長い睫毛、小さなふるふるした唇。主人公としても、恋敵としても納得できるビジュアルだ。素直にかわいらしい。

細い首は白くて、この位置からだと上着を脱いで首元を緩めたシャツから胸元が覗けて……

「あ」

「なーに……」